

『人間失格』と『葉蔵物語』

高田知波

言うまでもないことだが、『人間失格』の大庭葉蔵は息絶え絶えの状態で三冊のノートに赤裸々な半生の告白を書き綴っていたわけではない。葉蔵は自身を素材にした〈物語〉を精力的に制作していたのであり、その語り手・葉蔵によって意図的に創り出されたプロットを本稿では〈葉蔵物語〉と呼んでおきたいのだが、小説『人間失格』は〈葉蔵物語〉のプロットと同値関係にあるのではなく、その物語性自体が作品が照らし出すという構造性を有している。例えば第三の手記に添えられた写真について、「はじめに」の「私」は「ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちてゐるものが、その写真にハッキリ写つてゐる）の片隅で、小さい火鉢に両手をかざし、こんどは笑つてゐない。どんな表情も無い。謂はば、坐つて火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでゐるやうな、まことにいまはしい、不吉なほひのする写真であつた」というコメントを記している。これは第三の手記の末尾に描かれた葉蔵の「『廃人』の素顔が露呈した」⁽¹⁾イメージを映像によって鮮やかに裏付けているかのように見えるが、しかしこの写真が手記に添えるためにわざわざ撮

影されたものだった可能性が強いことを見落としてはならないだろう。なぜならこの写真の撮影場所が東北の温泉地の「壁は剝げ落ち」た茅屋の内部であることは間違いないが、葉蔵が隔離生活を送ったのだとすればここで彼がポートレートを撮られる外在的な事情があったとは考えにくい。したがってこの写真はたまたま華蔵の手にあつたのではなく、初めからこの手記に添えることを目的として葉蔵自身の意志によって撮影されたもの考えるのが自然だからである。つまりこの写真は、人物の表情やポーズはもとより、壁の崩れを「ハッキリ写」し出した構図に至るまですべて被写体である葉蔵自身によって決定され、演出された〈作品〉なのである。しかもこの茅屋の一室で、現像プリントされた写真群の中から、第三の手記に添えるのもっともふさわしい一枚を厳選している葉蔵の姿をさえ読者は想像することができるのであり、この写真が手記に添えられているという設定は、被写体の「無表情」が強調されることによつて逆に、手記執筆者としての葉蔵の自己演出意識の強列さを浮かびあがらせるものになつてはいるはずである。

1

自己演出された葉蔵の手記の読み手として想定されているのは、もちろん「京橋のスタンド・パアのマダム」である。第三の手記の末尾に出てくる「きのふ」という時間指示表現に着目して手記欄筆時点と投函時点との近さを論証した三谷憲正氏に、「この手記は京橋のマダムへの『手紙』でもある」という指摘があるが、葉蔵が初めからマダムを読み手としてノートを綴っていたことは、葉蔵と深い関係を持った女性たちの中で、マダムについての記述だけが極端に少ないという差異によっても明らかだと思われる。葉蔵の手記によれば、葉蔵は銀座のカフェの女給・ツネ子とは二回しか会っておらず、雑誌記者・シゲ子との「同棲」期間は一年強、煙草屋の少女・ヨシ子との結婚（「内縁」関係）期間は、脳病院収容時点までで約一年半という計算になる。一方彼が京橋のマダムの「男めかけの形」になっていた期間もほぼ一年半であるが、シゲ子のもとを去った葉蔵がその足でいきなりマダムのところに転がり込んだとき「『わかれて来た。』／それだけ言つて、それで充分」だったということとは、当然それ以前から二人が相当親しい関係にあったことを示しており、時間的に言つてもマダムとの関係が一番長かったと思われる。にもかかわらず「テツ」という老女中まで含めて、一緒に暮らしたことのある女性の名前と年齢を明らかにしている葉蔵が、マダムについてだけは名前も年齢も示さないだけでなく、いつどのようになり合ったのかについての経緯も、同棲生活の具体的記述も、

同棲相手としてのこの女性に対する印象や批評といったコメントもないという極端な省筆によって明らかに他の女性たちとは区別され、女性遍歴の物語の圏外に置かれている感が強いのは、マダムそのひとがこのエクリチュールの読み手として最初から選ばれていたからにはかなるまい。

その葉蔵の手記の中に、マダムが直接話法的な場面性を伴って登場する場面が一箇所だけある。催眠薬自殺を図って昏睡状態に陥っていた葉蔵が覚醒したシーンである。

「うん、何？ 気がついた？」

マダムは笑ひ顔を自分の顔の上にかぶせるやうに言いました。

自分は、ぼろぼろ涙を流し、

「ヨシ子とわかれさせて。」

自分でも思ひかけなかつた言葉が出ました。

マダムは身を起し、幽かな溜息をもらしました。

それから自分は、これもまた実に思ひがけない滑稽とも阿呆らしいとも、形容に苦しむほどの失言をしました。

「僕は、女のゐないところに行くんだ。」

うわつはつは、とまづ、ヒラメが大声を挙げて笑ひ、マダムもクスクス笑ひ出し、自分も涙を流しながら赤面の態になり、苦笑しました。

マダムについて唯一この箇所だけを場面化させた葉蔵は、このときのマダムの「笑ひ顔」の優しさを強調しつつ、さらにその際の自分の「失言」がマダムに「溜息」をつかせ「クスクス笑ひ」をさせ

てしまったことをひどく気にしており、あるとき自分は何故あんな失言をしたのか、その釈明のためにこの手記を執筆しているというメッセージをマダムに送っているのだとも考えることができるが、マダムが手記の読み手として選ばれていることとの関連でもうひとつ注目しておきたいのは、サナトリウムだと偽って葉蔵を脳病院に収容するために連携を組んだメンバーが堀木、ヒラメ、ヨシ子の三人であり、マダムは「葉蔵を脳病院に送る手だすけをした共犯者の立場にもたっていない⁽³⁾」という点である。葉蔵が覚醒したときヒラメとともに枕元にマダムが坐っていた。それは、夫の自殺未遂という混乱の中でヨシ子が最も頼りにした人物がマダムであったことを示しているはずであり、モルヒネ中毒の葉蔵を詐術を用いて脳病院に収容してしまうという計画がマダムにまったく知らされていなかったとは考えがたい。したがって「マダムがこの場面に登場しておれば、果して葉蔵を脳病院に入れることに賛成したかどうか。マダムの意思については不明である⁽⁴⁾」というよりも、マダムはこの計画を知らされていいてそれに加わることを拒んでいた可能性が強いと考えるべきであろう。少なくとも連携チームにマダムが加わっていないかっただという事実を通して、自分の脳病院収容計画に一人反対したマダムの姿を葉蔵が思い描いていたことは確かであり、自分を騙す計画に意志的に加わらなかったただ一人の存在としての聖性——マダムは自殺未遂の枕元には姿があり、脳病院収容行動には姿を見せなかった唯一の人物である。反対に自殺未遂の枕元には不在で、入院時に積極的な役割を果たしたのが堀木であり、覚醒時のマダムの「笑ひ顔」と脳病院収容時の堀木の「優しい微笑」とがコントラス

トを形成していることは明らかである——が、葉蔵が手記の受信者としてマダムを選定するにあたっての大きなファクターになっていたのではないかと思う。

葉蔵の手記がもともとマダムにあてて書かれたものだとすれば、受信者として選ばれたマダムの反応が問題になるが、小説の読者がそれを知ることができるのは「あとがき」の部分だけである。従来「あとがき」におけるマダムの言説は、末尾の「私たちの知つてゐる葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さへ飲まなければ、いいえ、飲んで、……神様みたいな子でした」という部分が前景化され過ぎてきらいがあるが、葉蔵の手記に関するマダムの最初のコメントが、手記を読んで「泣きましたか」という「私」の質問に答えて発話された「いいえ、泣くといふより、……だめね、人間も、ああなつては、もう黙目ね」というものであつた点を軽視すべきではないだろう。「ああなつては」の「ああ」が「私たちの知つてゐる葉ちゃん」と対比関係になっていることは言うまでもないが、この「ああ」とは何を指しているのか、つまりマダムは何が「駄目」だと言っているのだろうか。常識的には〈葉蔵物語〉のカタストロフィー部分、つまり脳病院収容に至る墮落を指しているように見えるが、それだとマダムは「酒」時代Ⅱ「いい子」／「モルヒネ」時代Ⅱ「駄目」というあまりにも単純な二項対立図式を踏まえていたことになる。「私たちの知つてゐる葉ちゃん」はマダムの知らない土地で自己の〈物語〉化に腐心している葉蔵に對置されているのであり、「ああなつては、もう駄目ね」というマダムの批判は〈葉蔵物語〉の編み手としての葉蔵に對して向けられていた可

能性をは考えてみるべきではないかと私は思う。⁽⁵⁾

2

幼少年時代を対象にした「第一の手記」における〈葉蔵物語〉のプロットは、「人間」に対する強い「恐怖」の念を抱いた子供が「人間」に対する最後の求愛」として、「おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合ひといふべき危機一髪の、油汗流してのサーヴィス」としての「道化」を案出し、「自分ひとりの懊悩は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナヴァスネスを、ひたかくしに隠して、ひたすら無邪気の楽天性を装ひ、自分はお道化たお変人として、次第に完成されて行」き、小学校に入って「尊敬されかけ」という「恐怖」を味わったもの、懸命にみんなを「笑はせる」ことに努めた結果、「自分は所謂お茶目に見られる事に成功しました」……という自己評価の言説を軸にして組み立てられている。そしておびただしコメントの合間合間に「道化」のエピソードが挿入されているのだが、これらのエピソードの叙述には場面としての現前性が欠如しているという特徴がある。そのために読者はそれらに対して、「道化」成功例として位置付ける葉蔵自身の評価を越えて直接向かい合う自由を封じられているわけであるが、第一の手記のエピソード群の中で例外的に場面性を与えられたものとして「シシマヒ」事件がある。⁽⁶⁾父親から東京土産に何がほしいかと尋ねられて「お道化た返事」ができずに「自分は父を怒らせた」という恐怖から、その夜父の部屋に忍び込

んで手帳にこっそり「シシマヒ」と書き込んで父の機嫌を直すのに「大成功」したというこの出来事を、語り手・葉蔵は「道化役者」の失地回復の事例として意味付けているのだが、直接話法で記された父親の台詞は「これは、葉蔵のいたづらですよ。あいつは、私が聞いた時には、にやにやして黙つてゐたが、あとで、どうしてもお獅子が欲しくてたまらなくなつたんだね。何せ、どうも、あれは、変つた坊主ですからね。知らん振りして、ちゃんと書いてある。そんなに欲しかつたのなら、さう言へばよいのに。私は、おもちゃ屋の店先で笑ひましたよ」となっている。葉蔵の「いたづら」が父を「笑」わせ、上機嫌にさせたのは確かだとしても、はたしてこれを「道化」の具体例として認定することができるだろうか。語り手のコメント群の圍繞から父親の言説を独立させてみると、父の笑いは「道化」に対するそれとは異質のものであるという感が強く、「変つた坊主」という父親の批評を、「お道化けたお変人」という葉蔵の自己規定とただちに一致させることはできない。〈葉蔵物語〉のプロットにおいては「道化」の具体例として位置付けられている「シシマヒ」事件が、逆にその叙述の直接性によって父親が本当に葉蔵を「剽軽」な子どもと見ていたかどうかに対する疑問を喚起するものになっているのである。

このように引用として復元された父親の言説は、自分の少年時代を「道化の上手」として括っていく〈葉蔵物語〉のプロットとの間にズレを生み出しているが、しかしそれが『人間失格』の〈作者〉にとつてはけっして誤算でなかったことは、第一葉の写真をめぐる葉蔵自身のコメントと「はしがき」の「私」のコメントとの対照性

によっても裏付けられる。「はしがき」における「私」の写真評と手記との対応関係の読み方については諸説があるが、私は第一の手記の中の「その頃の、家族たちと一緒にうつつした写真などを見ると、他の者たちは皆まじめな顔をしてゐるのに、自分ひとり、必ず奇妙に顔をゆがめて笑つてゐるのです。これもまた、自分の幼く悲しい道化の一種でした」という葉蔵のコメントに注目したいと思う。おそらく葉蔵はこのコメントの客観性を映像によって補強するために、古い家族写真の中から「幼く悲しい道化」の「笑」にふさわしい一枚を選び出したものと思われるが、その写真について「はしがき」の「私」は、

(略)いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見てすぐ、

「なんて、いやな子供だ。」

と頗る不快さうに呟き、毛虫でも払ひのける時のやうな手つきで、その写真をはふり投げるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何とも知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔ではない。この子は、少しも笑つてはゐないのだ。

というコメントを記しているのである。もちろんこちらのほうも「私」という虚構の語り手の主観に過ぎず、村瀬学氏が言うように「たまたまある一人の人物の手による写真解釈」の域を出ないことは確かであるが、本人が「笑つてゐる」代表的な一枚として選び取られた写真に対して「私」が「少しも笑つてはゐない」という印象を書き記しているという対立が、「道化の上手になつてゐました」

という〈葉蔵物語〉の物語性を相対化する機能を果たしていることは確かだと思ふ。写真まで添えて葉蔵が立証しようとしている道化能力の習熟を、〈作者〉は無条件には認めていないのである。

3

第一の手記で「道化の上手」という〈物語〉を編んだ葉蔵は、第二の手記の初めと終わりに「自分の生涯における演技の大失敗の記録」を一つずつ配置するという手法を用いている。〈葉蔵物語〉のプロットにおいてはこの二つの出来事に対して、「道化の上手」である葉蔵がそれを見破られた希有の事例という位置付けが与えられているが、このプロット形成そのものの中に語り手・葉蔵の強い作為を見出すことができる。第二の手記の冒頭に置かれた事件は〈出来事〉としては中学時代の体操の時間、鉄棒の練習中に葉蔵が「計画的な失敗」を演じてみせて「皆の大笑ひ」をかちえた時、竹一という少年が寄つてきて「ワザ。ワザ」と囁いた、というだけの内容である。葉蔵は中学入学後「れいのお道化に依つて、日一日とクラスの人気を得て」おり、「いつもクラスの者たちを笑はせ」ていたということになっている。「笑われる」少年と「笑わせる」少年とは同じではない。前者が演技性のない滑稽さによって周囲に笑いを巻き起こすのに対して、後者はまさしく「ワザ」と面白いパフォーマンスによって積極的に笑いの種を提供してくれる存在としてみんなに期待されている存在である。そして葉蔵の自己規定が明らかに後者に属する以上、この日の葉蔵の尻餅が「計画的な失敗」であるこ

とは周囲のみんなが承知していたと考えなければ辻褃が合わない。したがってこの日に葉蔵が「ワザと失敗したといふ事」を「見破」ったのは竹一だけではなかった、と言うより「ワザと」であることを当然の前提とした上でクラスみんなが笑っていたはずなのであり、それをわざわざ口に出した竹一がひとり「野暮」だったというだけの話に過ぎない。「ワザと失敗したといふ事」を見破られたことと、「人間恐怖」におののく自分の内面の「正体」を見抜かれたこととは明らかに次元が異なるにもかかわらず、語り手・葉蔵はこの出来事の叙述を、「もはや、自分の正体を完全に隠蔽し得たのではあるまいか、とほつとしかけた矢先に、自分は実に意外にも背後から突き刺されました」というコメントと、「自分は震撼しました。ワザと失敗したといふ事を、人もあらうに、竹一に見破られるとは全く思ひも掛けない事でした。自分は、世界が一瞬にして地獄の業火に包まれて燃え上がるのを眼前に見るやうな心地がして、わあつ！と叫んで発狂しさうな気配を必死の力で抑へました。／＼それからの日々の、自分の不安と恐怖」というコメントとで前後をはさんだ上に、竹一少年に「白痴に似た」という形容を与えて「異人」としての彩色を施し、神話的記号性が帯びさせることによって、「正体」看破の「大事件」として強引な意味付与を行っている。⁽⁸⁾

そしてこの事件の後、葉蔵は竹一に対して、「自分のお道化は、所謂『ワザ』では無くて、ほんものであつたといふやうに思ひ込ませるようあらゆる努力を払」ったという。体操の時間のパフォーマンスが「ワザとの失敗」であつたということと、「道化」自体が「ワザ」であることとを故意に混同することによって竹一少年を恐るべ

き洞察者に仕立てていく語りの詐術がここにも見られるが、しかも「道化」が「ほんもの」だと思ひ込ませるためにおこなった「努力」の内容として語られているのは、自分の「無邪気な楽天性」を証明する努力ではなく、「顔に偽クリスチャンのやうな『優しい』媚笑を湛へ、首を三十度くらゐ左に曲げて彼の小さい肩を軽く抱き、そうして猫撫声に似た甘つたるい声で」誘い、「女の言葉みたいな言葉を遣つて『優しく』謝」って親切そうに耳掃除をしてやるといった、およそ「道化」とは異質の種類「偽善の悪計」なのである。

「道化」が「ほんもの」だったと信じこませるために「偽善」を行うというのはまことに奇妙な構図であるが、これによって、もともと他人を笑わせるための必死のサーヴィスとして定義づけられていたはずの「道化」という用語の外延がなしくずし的に、下心を持つて外面を装う「演技」全般にまでおし広げられていっている点を見落としてはなるまい。このなしくずしが、第二の手記の末尾に置かれたもうひとつの「大事件」である「賈の咳」事件の意味付けの伏線を作り出しているからである。

周知のとおり、この「賈の咳」事件は自殺幫助罪で身柄送検された葉蔵が、陳述中に「れいの咳が出て来て、自分は袂からハンケチを出し、ふとその血を見て、この咳もまた何かの役に立つかも知れぬとあさましい駆引きの心を起し、ゴホン、ゴホンと二つばかり、おまけの賈の咳を大袈裟に付け加へて、ハンケチで口を覆つたまま検事の顔をちらと見た」時、「ものしづかな微笑」を浮かべた美貌の検事から「ほんたうかい？」と尋ねられた、という出来事である。語り手・葉蔵はこの場面を回想して「冷汗三斗、いいえ、いま

思ひ出しても、きりきり舞ひをしたくなります。中学時代にあの馬鹿の竹一から、ワザ、ワザ、と言はれて背中を突かれ、地獄に蹴落された、その時の思ひ以上と言つても、決して過言では無い気持ちです。あれと、これと、二つ、自分の生涯に於ける演技の大失敗の記録です」というコメントによって、「ワザ。ワザ」事件との同質性を強調するプロットを作り出している。たしかに葉蔵は「演技の大失敗の記録」と書いていたのであって、「道化の大失敗の記録」という表現はしていない。それは検事を前にした咳の演技が、他人を笑わせるためのサーヴィスという、自身による「道化」の定義にあてはまらないことを語り手が承知していた証左であろう。にもかかわらず、「賈の咳」事件は小説読者によって、しばしば「ワザ。ワザ」事件と並ぶ「道化」の失敗の二大記録というふうに読み替えられてきた。葉蔵の「道化」を「他者サーヴィスとしての『道化』」と『駆引き』や『計略』を含んだ打算的演技としての『道化』の二種類に分別した関口安義氏の見解も、「賈の咳」演技を「道化」の一種と見なす枠組みにとらわれていると思われるが、読者は「葉蔵物語」と『人間失格』とを峻別しておく必要があると私は思う。

「葉蔵物語」は、まさしく読み手をそういう方向に誘導するための仕掛けが駆使されており、「ワザ。ワザ」事件に対して、道化の「正体」を見破られた大事件という誇大な意味付与をおこなうとともに、その叙述の展開の中で「他者サーヴィス」という本来の定義とは異なる「偽善の悪計」をもなしくずし的に「道化」の範疇に忍び込ませてきた文脈の線上に、「ワザ。ワザ」事件と「賈の咳」事件とを並べて「演技の大失敗の記録」として括っていく「葉蔵物語」

の語りが、「ワザ」と「賈」とが同値のものとして読まれるコノテーション効果を狙っていることは明らかであるが、しかし小説『人間失格』は、そうした語り手の作為そのものを作品の構造の中に組み込んでいるのである。

4

「ワザ。ワザ」事件と「賈の咳」事件という二枚のパンに挟まれた第二の手記のサンドウィッチの中心は、「年上の有夫の婦人」ツネ子との「情死事件」である。前述のとおりこの手記の執筆動機が催眠業自殺未遂から覚醒したときにマダムに向かって「女のゐないところへ行くんだ」と口走ったその理由の弁明にあったとすれば、このツネ子との事件が大きな出来事として詳述されなければならなかったことは当然であるが、この事件の叙述に入る前に葉蔵は、「お前は女に惚れられるよ」という竹一の「お世辞」に「悪魔の予言」としての意味付与をおこなうことによって、「女に惚れられる」宿命を背負った男の物語というプロットを用意している。売春婦たちとの「修行」を通して「自分には、あの『女達者』といふ匂ひがつきまとい、女性は、(淫売婦に限らず)本能に依つてそれを嗅ぎ当て寄り添つて来る、そのやうな、卑猥で不名誉な雰囲気」が身についたという自己規定は、第一の手記の末尾に記された「自分の孤独の匂ひが、多くの女性に本能的に依つて嗅ぎ当てられ」たというコメントと呼応しあうことによつて、「女性たちの「本能」によつて「惚れられる」葉蔵」という徹底的に受動的な関係の宿命と

して構図が強調されているのであるが、この操作は、「情死事件」の核心とのかかわりにおいて〈葉蔵物語〉にはどうしても必要だったのである。

男女が「情死」をはかって女だけが死に、男が生き残った……。

このケースではどちらの側が「情死」の話を持ちかけたのかが大きな問題になるはずである。この点について〈葉蔵物語〉では「女の口から『死』という言葉がはじめて出」て、葉蔵がその「提案」に「同意」するとうかたちで「情死」の話がまとまり、「その時にはまだ、実感として『死なう』という覚悟は、出来てゐなかつた」が、がま口の中に銅銭三枚しかないのを見つけたツネ子から「あら、たつたそれだけ」と言われた時に「とても生きてをられない屈辱」を感じて「みづからすすんで死なうと、実感として決意」したという、一貫してツネ子主導のプロットになっている。このプロットが成立するためには、まず葉蔵がツネ子から「惚れられる」関係にあったということが前提になっていなければならぬ。そのため語り手・葉蔵はツネ子との出来事を「その頃、自分に特別の好意を寄せてゐる女が、三人ゐました」という叙述から書き始め、この「三人」の「女」の中にツネ子を組み入れるという文脈を設定している。あとの二人は葉蔵の下宿先の娘と、左翼非法運動の「同志」の女子学生であり、この二人のエピソードが紹介されたあとにツネ子が登場してくるといふ手記の構成になっているが、「三人」の「女」という枠組みをはずしてツネ子に関する叙述だけに注目してみると、ツネ子が葉蔵に「特別の好意を寄せて」いたというリアリティは希薄である。「銀座の或る大カフェの女給」であるツネ子と

葉蔵が会ったのは二度だけであるが、いずれも葉蔵が客としてカフェを訪ねている。一度目は「十円しか無いんだからね、そのつもりで」、「心配要りません」という会話によって葉蔵が「そのひとの傍にいる事に心配が要らないような気がし」て、その晩ツネ子の下宿に泊まった時にも「そのひとに寄り添ふと、こちらのからだもその気流に包まれ、自分の持つてゐる多少トゲトゲした陰鬱の気流と程よく溶け合ひ、『水底の岩に落ち附く枯葉』のやうに、わが身は、恐怖からも不安からも、離れる事が出来」て「幸福な」、「解放された」一夜を過ごす。それからひと月後、堀木と一緒にカフェを訪れて堀木がツネ子を「貧乏くさい女」と呼んだときに「ツネ子がいとしく、生れてこの時はじめて、われから積極的に、微弱ながら恋の心の動くのを自覚し」て前後不覚になるほど酒に酔い、目が覚めたら再びツネ子の下宿にいた……。手記に書かれたこの経緯から、葉蔵に「特別な好意」を抱いてた女性としてのツネ子の具体的なイメージを造形できるだろうか。むしろ関係の主導権が葉蔵の側にあった可能性の方が浮かび上がってくるが、さらに注目すべきはこの二度目の宿泊のときにツネ子が情死の「提案」をしたという、肝心の箇所の叙述が場面としての現前性を欠落させている点である。

眼が覚めたら、枕もとにツネ子が坐つてゐました。本所の大工さんの二階の部屋に寝てゐたのでした。

「金の切れめが縁の切れめ、なんておっしゃって、冗談かと思ふてゐたら、本気か。来てくれないのだから。ややこしい切れめやな。うちが、かせいであげても、だめか。」

「だめ。」

それから、女も休んで、夜明けがた、女の口から『死』といふ言葉がはじめて出て、女も人間としての営みに疲れ切つてゐたやうでしたし、また自分も、世の中への恐怖、わずらはしき、金、れいの運動、女、学業、考へると、とてもこらへて生きて行けさうもなく、そのひとの提案に気軽に同意しました。

ここには、ツネ子が葉蔵に情死を「提案」した理由が何一つ語られていない。直接話法で再現された限りでのツネ子の言葉のベクトルはむしろ生の方向を示しているし、「人間としての営みに疲れ切つてゐたやうでしたし」という表現も、このときのツネ子の発話内容の要約ではなく葉蔵の推察であり、手記の読み手にも小説の読者にも、死を「提案」したとされる、そのツネ子の声を聞きとることに不可能な叙述になっている。一方葉蔵の側にはすでに左翼非合法運動から「逃げ」た時に「さすがに、いい気持はせず、死ぬ事になりました」という叙述があつたことが想起されねばならないだろうし、また『死』といふ言葉が「出」たことと、情死が「提案」されたこととは決して同義ではないということも確認しておく必要があると思われるが、さらに注目したいのは、この叙述過程で呼称が「ツネ子」から「女」に変換されているという事実である。それまで「ツネ子」と呼ばれていた女性が、「金の切れめが……」という直接話法の直後から急に「女」という呼び方に変わり、「女のひとは、死にました」というかたちで「女のひと」が使われたあとに、「死んだツネ子が恋しく、めそめそ泣いてばかりゐました」というかたちでもう一度「ツネ子」が復活してくる……という呼称使用の変遷になっており、情死の相談から決行までという最もなまなまし

い部分だけに「女」という呼称が採用されているのは語り手による意識的な選択であつたことはまちがいない。この点について「死を決意した段階ですでに死んでいる」からその「物体視」の語感が「女」という呼称に表れているとする国松昭氏の解釈があるが、私は「ツネ子」という固有名詞を消して「女」という普通名詞に変えることによって、葉蔵の「孤独の匂ひ」を「本能的に嗅当て」くる存在という〈葉蔵物語〉の「女」一般についての規定の中にツネ子の個別性を溶解させてしまおうとする語り手・葉蔵の意図を読み取らうと思う。ツネ子が〈葉蔵物語〉における「女」のプロットを作り出しているのではなくその逆——つまり〈物語〉中にあらかじめ設定された「女」のプロットに依存することによってしか、ツネ子が「提案」して葉蔵が「同意」するというラインでの事件の叙述は不可能だったのでないかと私は考えているのである。

このように、ツネ子の側が情死を「提案」して葉蔵がそれに「同意」したとする〈葉蔵物語〉の叙述は、〈出来事〉と〈物語〉との間の落差を想像させずには置かないという気が私はするのだが、事件後自殺補助罪容疑で検事局へ譲送させるシーンの叙述の中に「自分には少しの不安も無く、その警察の保護室も、老巡查もなつかしく、嗚呼、自分はどうしてかうなんでせう、罪人として縛られると、かへつてほつとして、さうしてゆつたり落ちついて、その時の追憶を、いま、書くに当たつても、本当にのびのびした楽しい気持ちになるのです」という手記執筆時点での「いま」の心情が挿入されている。葉蔵の語りの中に手記執筆時点での「いま(今)」が明示されている事例はほかにもあるが、それらは「姓はいま記憶しては

みませんが、名は竹一といったかと覚えてみます。「堀木の場合、それ以外の理由は、自分には今もって考へられませんが」といったように「いま」の認識や記憶として出てくるのであり、手記を「書く」行為自体に直接関わる「いま」の心情が明示されている例はほかにない。「罪人として縛られ」た追憶を「書く」行為によって語り手が「のびのびした楽しい気持ちになる」という心情の吐露は、それまでの情死事件を「女」のプロットに依拠しながら「物語」として編んでいく作業が、語り手・葉蔵にとって罪の意識をあらためて喚起される苦しい行為だったことを対比的に浮かび上がらせている。女の側が「情死」を「提案」し、自分が「同意」したというのが「出来事」のレベルでの真実であれば、男だけが生き残ったことは「恥」ではあっても「罪」ではない。第一の手記の冒頭に明記されている「恥の多い生涯を送ってきました」という半生を概括するコメントは、ツネ子の「提案」・葉蔵の「同意」というプロットと対応しているはずであるが、情死事件の叙述過程における「出来事」と「物語」との落差の自覚が、かえって「罪」の意識を強化してしまったというパラドックスを私は想定しているのだが、だとすれば「物語」の要請によって「ワザ。ワザ」事件と並立する事件としての意味付与とともに前景化された美貌の検事の「ほんたうかい」という眼差しが、「物語」の語り手としての葉蔵自身を圧迫するというもうひとつのパラドックスの存在を見ることもできるはずである。⁽¹¹⁾そしてそれまで「恥の多い生涯」という枠組みによって「葉蔵物語」を編んできた葉蔵は、第二の手記の末尾において、「罪」の問題を「物語」中でいかに処理していくかという問題に直面せざる

を得ず、そこで第三の手記の中で採用されたのが、「恥」と「罪」とを故意に混同させるという戦略であった。これまでの『人間失格』論の中で「恥」と「罪」の関係がアポリアになってきた原因もここに由来しているのではないかと私は思う。

5

第三の手記におけるアント遊びの場面で葉蔵が「罪」のアントにこだわっていることは多くの論者によって注目されてきているが、見落としてならないのは「恥のアントは？」という葉蔵の問いに堀木が「恥知らずさ」と答えたあたりからこの遊びが「陰惨な気分」になってきたというにもかかわらず、葉蔵がそれ以上「恥」のアントを迫及することなくいきなり「罪」のアントの質問に移っていることと、「罪」のアントにそれだけこだわっている葉蔵がその候補として「恥」を思い浮かべる発想が見られないという設定になっていることである。ここには「恥」と「罪」との関係の考察を回避しようとする姿勢が見られるが、この両者の関係を曖昧にしておかない限り「葉蔵物語」の枠組みがこわれてしまうことを語り手・葉蔵は知っていたはずである。それはヨシ子との新婚家庭を堀木が初めて訪ねてきた場面における「たちまち過去の恥と罪の記憶が、ありありと眼前に展開せられ、わあつと叫びたいほどの恐怖で、坐つてをられなくな」ったというかたちで「恥」との並列の関係で「罪」という言葉が登場させられていることや、脳病院に入院させられる直前に自殺決意をする場面でも「死にたい、もう取り返しがつかないん

だ、どんなことをしても、何をしても、駄目になるだけなんだ、恥の上塗りをするだけなんだ(略)、ただけがらしい罪にあさましい罪が重なり、苦悩が増大して強烈になるだけなんだ、死にたい、死ななければならぬ。生きているのが罪の種なんだ」というように、やはり「恥」と「罪」が並列的に使用されていることから明らかにである。そしてようやく「罪」という言葉が単独で使われ、その内容規定が初めて示されるのは、手記の終わりに近い、脳病院収容後の場面における「神に問ふ。無抵抗は罪なりや」という問いかけの中にあってであるが、この反問的な叫びと、例のアント遊びの夜に起こったヨシ子の事件にもとづく「無垢の信頼(心)は罪なりや」という神への問いかけのリフレインとが重ね合わされているところに、第三の手記における語り手・葉蔵の苦心の仕掛けがある。

ヨシ子が「強姦」されたのかどうかについての叙述の曖昧さはすでに指摘されているところであるが、それは〈葉蔵物語〉の関心が、事件そのものではなくもっぱらその意味付けに置かれているからだと思われる。語り手・葉蔵はこの事件がヨシ子の「無垢の信頼心」ゆえの悲劇であることを強調する。しかし新妻ヨシ子を徹底的な「無垢の信頼心の持ち主」、「信頼の天才」として規定する〈物語〉のプロットは、ヨシ子自身の声を排除することによって成立していると言っている。結婚後のヨシ子の像は「じつさい、ヨシ子は、信頼の天才と言ひたいから、京橋のバアのマダムとの間はもとよりに、自分が鎌倉で起こした事件を知らせてやつても、ツネ子との間を疑わず、それは自分が嘘がうまいからといふわけでは無く、時には、あからさまな言い方をする事さへあつたのに、ヨシ子には、そ

れがみな冗談としか聞きとれぬ様子でした」といった、場面としての具体性を欠いた語り手の一方的なコメントの言説の中に封じ込められている。葉蔵の叙述の中から読み手がヨシ子の声をかろうじて聞き取ることができるのは、例の事件のあとでそら豆をもってきて「なんにもしないからつて言つて……」と釈明しかける場面と、モルヒネ注射をする葉蔵に向かってそれを止めるのではなく「痛くないんですか」と尋ねる場面の二箇所だけであるが、前者の場合は葉蔵の「いい。何も言ふな。お前は、ひとを疑ふ事を知らなかつたんだ」という言葉によって釈明の続行が抑止されているし、後者はモルヒネを強精剤だと信じて疑わない「神の如き無知」という規定の中に組み込まれている。一方結婚前のヨシ子の像については、葉蔵の禁酒をめぐる会話において鮮明な場面性が与えられているが、その中に「馬鹿野郎。キスしてやるぞ」、「してよ」というやりとりが混入されている点を看過してはなるまい。いったん禁酒を約束した以上、葉蔵が飲酒をしているはずがないと信じて疑わないことは「無垢の信頼心」の表れとして理解できるとしても、キスを拒まないことと信頼心とは別個の事柄のはずである。そしてこの「キス」の受容を、葉蔵という個別の男に対する愛情表現ではなく、もっぱら「処分性の美しさ」の表れとしてのみ規定することは、「女に惚れられる」男の話」というそれまでの〈葉蔵物語〉の枠組みから逸脱することになるはずであるにもかかわらず、語り手・葉蔵が禁酒についての挿話とキスの一件を「無垢の信頼心」という一色に塗り込めている狙いは、事件後の「こいつは警戒を知らぬ女だったから、あの商人といちどだけでは無かつたのではなからうか、また、

堀木は？ いや、或いは自分の知らない人とも？」という「疑惑」に根拠を与えつつ、「無垢の信頼心」と「無抵抗」、「ひとを疑ふ事を知らぬ」いことと「他人を拒否しない」ことを同類項で括る論理を〈物語〉内に作り出すところにあつたと思われる。

「自分のやうな、いやらしくおどおどして、ひとの顔色ばかり伺ひ、人を信じる能力が、ひび割れてしまつてゐるものにとつて、ヨシ子の無垢の信頼心は、それこそ青葉の滝のやうにすがすがしく思はれてゐたのです」とあるように、本来、「無垢の信頼心」は葉蔵にはまったく欠落しているヨシ子独得の「美質」であり、だからこそ葉蔵はヨシ子の「ヴァジニテイ」に魅かれたはずであつた。一方葉蔵自身についてはその「無抵抗」性が、「人から与へられるものを、どんなに自分の好みに合はなくても、それを拒む事は出来ませんでした」、「口応へ一つ出来ないたちの自分」といったかたちで、負の「性癖」としてくりかえし語られてきており、それが「自分はいつたい俗にいふ『わがままもの』なのか、またはその反対に、気が弱すぎるのか、自分でもわからないけれども、とにかく罪悪のかたまりらしいので、どこまでも自らどんな不幸になるばかりで、防ぎ止める具体策など無いのです」という表現を経て、「自分の不幸は、拒否の能力の無い者の不幸でした。すすめられて拒否すると、相手の心にも自分の心にも、永遠に修繕し得ない白々しいひび割れが出来るやうな恐怖におびやかされてゐるのでした」という命題を形づくっていた。したがってヨシ子の「無垢の信頼心」の中に「他人を拒否しない」というファクターをのびこませてしまえば、「ひとを疑ふ事を知らぬ」いヨシ子と「人を信じる能力が、ひび割れてしま

つてゐる」葉蔵という対極的なはずの二人が「拒否の能力の無さ」という一点を媒介にして共通項を有することになり、「無垢の信頼心は罪なりや」というヨシ子の命題と「無抵抗は罪なりや」という葉蔵の命題とが重なり合うというプロットが生み出されてくる。つまりヨシ子の「無垢の信頼心」が「罪」でなければ葉蔵の「無抵抗」も「罪」ではない、そして葉蔵の「無抵抗」が「罪」でなければ葉蔵は罪なき不幸を生きてきたことになる……という文脈を作り出すために、ヨシ子の「無垢の信頼心」が利用されているのである。⁽¹²⁾

「無垢の信頼心は罪なりや」というリフレインは「本来、罪のアントニムたるべき無垢が、なぜ罪のシノニムになるかという痛切な抗議⁽¹³⁾」というよりも、一見「抗議」のかたちをとりつつ「信頼心」を持たない葉蔵の「無抵抗」の逆説的な「無罪」証明の材料として〈物語〉の中に組み入れられて見ると見るべきであり、事件後のヨシ子のいたいたしい変貌についても、「青葉の滝」から「黄色い汚水」への変化という、葉蔵にとつての価値の喪失という点にしか語り手・葉蔵の関心は注がれておらず、ヨシ子がひそかに自殺用の催眠薬を購入して台所に隠していたという叙述も、ヨシ子自身の内面に向かつて想像力が作動していくのではなく、ヨシ子の無知が葉蔵の自殺手段を提供したというプロットの中の線の中に吸収されていく叙述になつてゐる。〈出来事〉の場で小男の商人の犠牲になつたヨシ子を、〈物語〉の場でもう一度犠牲に供することによって〈葉蔵物語〉が完成させられていふと言つても過言ではないと私は思う。そしてこの語り手が一方的にプロットを支配していくという手記の叙述形態は、マダムに郵送する際に差出人の住所氏名が表示されてい

ないことと対応しているはずであり、返信の到来によって自分の言説が批評され相対化される可能性をあらかじめ断ち切っておくことによって、葉蔵の〈物語〉は完結させられているのである。

一方この手記を「何か、小説の材料になるかも知れませんか」というマダムの言葉とともに手渡された「私」は、「朝まで一睡もせず」に「読みふけた」あとで「下手に私の筆を加えるよりは、このまま、どこかの雑誌社にたのんで発表してもらったほうが、なほ、有意義な事のやうに思はれた」と「あとがき」で書いている。葉蔵の手記にはない「はしがき」「あとがき」を付すことと「このまま」発表することとは矛盾するが、しかし手記を「材料」にしてあらたな〈物語〉を創出することの拒否を「私」が言明していることの意味は小さくないと思う。そこに葉蔵の手記の叙述方法に対する「私の」批評の意図を読みとることができるところであり、マダムの言葉を直接話法で再現しながらそれに対する「私」の解釈や意味付けの言説を記さない「あとがき」の話法もこの意図と密接に結び付いていると思われる。(「身内の者の縁談」や「子供たちへの土産」といった市井性の表現は、小説家としての「私」の凡庸さの証拠にはならないはずであるし、マダムとの会話の中で発話された「僕がこのひとの友人だったら、やつぱり脳病院に連れて行きたくなつたかも知れない」という言説も、もちろん地の文における「朝まで、一睡もせずに読みふけた」という一節との関係性の中で読まれる必要がある。)また「はしがき」は「私」のコメントだけで埋められているが、それは雑誌への「発表」の不可能な「写真」に対する感想に限定されており、葉蔵が手記に写真を添え

ていたことを前景化する一方で、三葉の写真の印象を一本の線にすぎあわせてあらたな〈物語〉が生成されることを避けた叙述になっている。「はしがき」「あとがき」は〈物語〉の抑制という点において、葉蔵の手記における〈物語〉の放恣とは対照的なエクリチュールになっているのである。

このように葉蔵に存分に〈物語〉を語らせ、読者の感情移入を導きながら、同時にその〈物語〉性を顕在化させていく『人間失格』の方法は、〈作者〉と主人公との一体性、語り手の真实性を絶対的な前提として作品世界が一元的に支配されている志賀直哉の方法とは根本的に対立するものであり、『人間失格』と併行して激越な志賀批判を基調とするエッセイ『如是我聞』が執筆されたモチーフを、この面からも探ってみることができるとはならないかという気もするのだが、その問題の考察については別稿に譲るしかない。

注

- (1) 野口武彦氏「『道化』と『仮面』の双曲線——『人間失格』と『仮面』の告白をめぐって」『ユリイカ』一九七五・三、四。
- (2) 『人間失格』論——「手記」と「あとがき」の〈時のしくみ〉をめぐって——『日本語と日本文学』一九八七・六。
- (3) (4) 佐々木啓一氏『太宰治論』(和泉書院、一九八九)。
- (5) 「あとがき」に記されたマダムのもうひとつのコメントの「あのお父さんが悪いのですよ」も、いろいろに議論されてきている多義的な言説である。マダムは葉蔵の父親との面識はないはずであるが、父親が死んで間もなく長兄が葉蔵を退院させていることから推して、葉蔵を脳病院に入院させるという措置は父親の意志によるものと

考えられる。マダムが、サナトリウムと偽って入院させるといふやり方に反対していたとすれば、その主導者である父親に対する批判を抱いたのは当然であり、葉蔵を「駄目」にした契機としての入院（「駄目」になったから入院したのではない）の影響の大きさを葉蔵の手記によって再確認したという一面を想像してみることも可能だろうと思ふ。

(6) このほか、夏にセーターを着て歩いて家中の者を笑わせたエピソードのところに「それあ、葉ちゃん、似合はない」という長兄の言葉が直接話法で括り出されているが、ここは場面としての具体性を備えているとはいいがたい。

(7) 『人間失格』の発見 倫理と論理のはざまから（大和書房、一九八八）。

(8) 葉蔵自身が「どうやら、無事入学出来ました」という表現に入学試験の厳しさが暗示されている旧制中学に、「白痴に似た」少年が入学できたはずがない、という平岡敏夫氏の指摘がある（『その収束するところ——『人間失格』を中心に』『国文学』一九七六・五）。平岡氏はそこに「作者の勝手な設定」を見ているが、それは語り手・葉蔵の作為であって、その作為性を〈作者〉は隠蔽していないというのが私の読みである。

(9) 『人間失格』論 『太宰治』 怒れる道化師（教育出版センター、一九七九）。

(10) 『人間失格』『暗夜行路』と比較して『太宰治』一九八五・七。
 (11) 「ほんたうかい？」という検事の言葉の復元のすぐあとに「いま思ひ出しても、きりぎり舞ひをしたくなります」という、「書」にいて「いま」にきわめて近い、「いま」の心情が叙述されている点も注目されている。「思ひ出し」に「いま」の心情表現の用例もここだけである。

(12) 『人間失格』の〈作者〉が葉蔵と単純な共謀関係にないことは、例

えば『あさましきもの』との比較によっても明らかであろう。『人間失格』論の中でしばしば引き合いに出されてきたこの短編小説は三つのエピソードによって構成されているが、その中に、映画俳優岡田時彦の体談の聞き書きという設定のもとに、禁酒の誓いを破ったと言ってもそれを信じずに「誓つたんだもの。飲むわけないわ。お芝居はおよしなさいね」と「濁りなき笑顔」で言い張る無垢な煙草屋の少女の話が出てくる。ヨシ子との類似性は歴然としているが、この『あさましきもの』のエピソードの方には「キスしてやるぞ」「してよ」というやりとりが含まれていない。したがって「太宰治」名で発表された両作品の比較によって、「無垢の信頼心」の中にひそかに「無抵抗」を混入させる葉蔵の語りの作為性が照射されることは、『人間失格』の〈作者〉の計算に入っていたと見てよいだろうと思ふ。なお現実の時間において『あさましきもの』が発表されたのは一九三七年三月であるが、虚構の時間における葉蔵の手記執筆時期はこれに近接した時点で設定されている。